

小児看護 OSCE 国内での取り組みに向けて

私が勤務する札幌市立大学看護学部(以下、本学)は、2006(平成18)年度に開校しました。開校初年度から、学生が段階的かつ確実に実践能力を陶冶できるカリキュラムの充実と教育・評価システムの構築を意図して、客観的臨床能力試験(objective structured clinical examination; OSCE)に取り組んできました。OSCE は判断力・技術・マナーといった実践現場で必要とされる基本的な臨床技術の修得を適正に評価する方法です。

看護学教育では、2001(平成13)年ころから大学や専門大学、あるいは卒後の継続教育に OSCE が用いられるようになったと伝えられていますが、その詳細は明らかではありません。本学が OSCE を開始した当初は、試行錯誤の連続でした。幸い、医学部・歯学部・薬学部が共用試験として OSCE を導入した時期に重なったこともあり、そのノウハウの多くを医学系教育セミナーや研修会講師から学ぶことができました。

現在までに、数校の看護系大学が学部教育において小児看護学領域の OSCE (以下、小児看護 OSCE)に取り組んでいることを報告しています。しかし、そのシステム構築や実施方法に関する情報共有を行う水準には達していません。

そこで私たちは、2015(平成27)年度に、日本看護系大学協議会会員校247校の小児看護学担当

教員1人/校を対象に、小児看護 OSCE の取り組みの実態、および小児看護 OSCE の一般化に向けた研修会ニーズなどについて調査を行いました。調査票の回収数は93、回収率は37.7%でした。そのうち小児看護 OSCE の実施大学は9校(9.7%)と少なかったのですが、今後、小児看護 OSCE の取り組みを予定している施設は25校(26.8%)、研修会への参加ニーズは6割と高いことを把握しました。

また、小児看護 OSCE の実施大学からは、「公開可能な課題がある」という回答をもらいました。一校一校の取り組みは小さくとも、「三人寄れば文殊の知恵」のごとく、協働によって大きな一歩を踏み出せるのではないかと考えたいです。

本特集では、本学および他大学で活用経験・検証経験のある10の小児看護 OSCE 課題を公表します。それらはまだまだ改善の余地がありますので、読者の皆さまから厳しいご意見やアドバイスをいただきたいと考えています。

私たちの OSCE の経験知が、小児看護学の基礎教育および継続教育のお役に立てば幸いです。

札幌市立大学看護学部教授

松浦和代

Matsuura Kazuyo